

---

# 足りない人達の話

ふぁみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

足りない人達の話

### 【Nコード】

N6044D

### 【作者名】

ふぁみ

### 【あらすじ】

できそこないな人達の物語です！主に1話完結になってます。コメディの要素が大きいです。基本的に思いついたままのテキストな話です。気分で更新です。多種多様な物語になると思います。前書きを見て読むか読まないか判断すると思います。

## 【化】（前書き）

コメディークチックで、少しブラックです。  
『猛』若禿。情緒不安定。低所得者。

主人公『山田

## 【化】

俺は内に秘めた思いを熱く語る。

「お前らは何も分かかってねえーよ！！毎日つまようじに溝掘る仕事なんて不安に決まってるんだろ！」

俯いて誰一人として言葉を発さない。俺は話を続けた。

「なんでお前らピシツとスーツで俺だけ作業服なんだよ、俺は聞いてないぞ！スーツで来るなんて！」

言葉にすると、俺の激情は更に熱を帯びた。お前！と友人の一人を指し、年収は！？と叫んだ。

「400万くらいかな……」こいつ！一気に血が頭に昇りクラクラする。涼しい顔でぬけぬけと！俺は知っている。奴は500万以上稼いでいる。

「いい加減にしろよ！馬鹿にしてんのか！それとも、なにか？お前なりの優しさか！？」

俺の年収120万。アルバイトと言われてもおかしくない給料だ。

怒りの原因は他にもある。目の前には、今年某有名大学を卒業し優良企業に就職が決まった女性が4人。俺は合同コンパなんて聞いてない！怒りの矛先を女性達に向けた。

「俺はこれでも年上なんだぞ、社会の先輩だ、なのにお前らの態度はなんだ！」

女性達はポカンと口を開けて俺を見ている、一人を除いて。茶色のロング、肌は小麦色で、化粧が濃く目元の黒い化粧が威圧的で気が強そうな女だ。そいつだけは俺を奇妙な生き物を見るような目を向け、口元は馬鹿にした笑いを含んでいる。俺は、そいつを睨みつけた。すると女はいきなり立ち上がった。

「不愉快なんだよ！お金持ちのイケメンと合コンって聞いたから来たのに……！」

「きつ、来たのに何だ！」

いきなりの反攻に驚き、マヌケな声になってしまった。

「なんで、貧乏そうなダツサイハゲ親父が混じってんのよ！」

ハゲ親父って…ひとつだけ言わせて！俺の父親もお祖父さんも禿げてなかつから安心してたんだよ。まさかだよ！まさか禿げるとは…俺も現実感ないよ！俺は悪くない！俺は禿げてない！あ、あとさあ、親父じゃないの！俺はまだ27歳、独身。

「なにブツブツ言ってるんだよ！キモいんだよ！帰れよ！ハゲ！」

もう、何を言われても感情に波は立たなかった。伏せた顔をゆっくり上げ女を見つめた。残り少ない髪が顔にかかるが邪魔ではない、邪魔になるほどない。

「…」

女は怪訝そうな顔で黙って俺を見ている。俺が言葉を発するのを待っているようだ。

俺は、こめかみ辺りの髪を耳にかけニヤツと笑った。特に意味はない。

「意味不明だから！あんたみたいな世の中の底辺にいる奴とは関わるのも嫌なんだよ！！」

罵声につぐ罵声。逆にスッキリとした気持ちになる。俺は認めたくなかった。周りも俺を庇い、哀れんだ。尚更、俺は現実を見なくな

った。俺は、いつのまに負けていたのだろう。

テーブルに置かれたワインの瓶を掴むと、らっぱ飲みで一気に飲み干す。すごく安っぽい味がした、高い味なんか知らないが。俺は下戸で何故か特にワインに弱い、すぐに酔いが回った。

周りから、大丈夫か？とか、迷惑な奴！なんて声が聞こえる気がするが無視。

ゆらゆらとテーブルに体重を預け並べられた料理を何とは無しに目を向けた。厚焼き玉子に、角煮とサラダ……………ほっけ。

標準の定まってない手で、冷え切ったほっけのひらきを掴むと思い

つきり握り潰す。指と指の間から白いほっけの身が顔を出している。ほっけの脂でベトベトになった手を眺めた。俺は、ほっけの脂を両手に延ばしポマードの要領で髪につけた。ささっと敏腕サラリーマンが朝の髪の設定をするかの様に機敏な動きでオールバックに仕上げた。

ふうーと息を吐き、天を仰いだ。顔を戻し、ずっと胸を張って皆に体を向けた。

「ニコラス・ケイジに見えるかい？」

私は爽やかに笑みを浮かべながら言った。私は返答を待たずに、持参した水色の水玉柄の傘を手に取り居酒屋屋を出た。

いつの間にか雨はあがっていた。少し湿っぽい夜の空気は、私にはどこか心地いい。水玉の傘をクルクル回し不恰好なスキップをしながら夜風を切った。

後ろで居酒屋の扉が勢いよく開く音がして、あの女が何かを叫んだ。だが私には聞こえない、今聞こえるのは風を切る音と私の声だけだ。

【禿】（前書き）

ハゲコメディー。

主人公『花岡信哉』がつつりハゲ。

## 【禿】

ここ五年間に猛烈なスピードで進行、俺を蝕んだ。もう末期だ。

しかし、なんと明日。明日なのだ。同窓会が。同窓会とは、今までの自分の発表会なのである。

ある者は、俺がっこよくなったでしょと発表。ある者は、昇進してさあ羽振りいいわけよと発表。

そして、発表に合わせ女性陣がついてくるわけだ。憧れマドンナさえ十数年後の発表次第で自分の物になるのだ。

そして、俺の発表内容だが俺はモトクロスの大会で7位とハゲました。モトクロス7位でも決めてに欠ける上に、それを掻き消すハゲ。周りから見たら、俺の発表はハゲましたよ、のみしか伝わらないだろう。これでは女性は望めない。俺ももう36歳。出会いなんてあるわけない。職場の女性は50オーバー、ツヤのない真っ赤な口紅の方達ばかりだ。

そろそろ結婚したい…

ハゲをなんとかしなくては。

よし、ツラでいこうではないか。去年購入したツラ。七万円。

被り鏡の前へ移動した。ポーズを決める。カンパリーのポーズ。壁にもたれ澄ました顔。

駄目だ。さすがに七三のカツラじゃ何をしても様にならない。しかもカツラが少し浮いている。全力でカツラ選び間違えた！くそー！去年の俺死ね！去年、これでハゲ気にしなくて済むって安心した俺死ね！



どうすつかなあ…いつそのこと剃るか？でもなあもし剃って一生はえてこなかったらなあ。それに今の髪の量ならまだ一見したらハゲには見えないし、まあ結局ハゲてるってバレるんだけど。

若い頃はみんな「ハゲたらソッコロ剃る！」とか言ってたけど実際そんな簡単に割り切れねえーんだよな。未来なんて先のことな学生時代のフサフサの俺死ね！

もうどうするのよ僕。帽子被っちゃう？でも年齢が年齢だし同窓会はスーツしょ？スーツに帽子ってどうよ？キャップは絶対ねえーよな。ハットは…微妙だなあ、まあ無しだな。ハンチング、ニット帽、ベレー帽、麦藁帽。全部なしだよなあ…若い頃はワイシャツに下ジヤージ（もちろんシャツをジャージイン）でも羞恥心なんてなかったのに。あの頃の俺のファッションセンスはねえーなあ。毛がフサフサなうちに、もう少しオシャレしてれば彼女くらい出来てたのに！当時の俺死ね！ファッションよりRPGの防具な俺死ね！

ああーいいアンサー浮かばねえなあ。流行りのあれするか！毛付きフィルムを頭に貼付けるやつ。あれなら一発だろう！早速、ネットで検索。意外に高いなあー。っておい！最寄りの店舗が遠い！俺は車ねえーんだよ、帰り終電に間に合わねえよ。いつでも免許なんて取れるわい！なんて思って進路決定後に楽しめた俺は死ね！

明鏡止水。考えるな！感じる！

一休さん、俺に知恵をお授けください。

よし、剃る。決めた！剃ります。僕スキンヘッドになる。

うーん、やっぱ嫌！スキンヘッドって響き最悪！なんかキモい！

おっと、気付けば時刻は夜中ではないか。しょうがない。

最終手段、奥義、必殺、一撃。後半違うな。まあいいや。  
俺、同窓会いかん！！これでいいや。寝よ。

うるせえなあ。なんだ、携帯鳴ってる。誰だよ、山口か。

「はい、もしもし。何だよ？」

「お前なんでこなかったの？」

「具合悪かったんだよ！」

「そうか、しょうがねえなあ」

「で、同窓会どうだった？」

山口から色々な話を聞いた。担任だった鬼ボクロの寺田が亡くなつたとかマドンナの陽子ちゃんは一児の母だとかモヤシっ子だった米田が建築会社の社長だとか…  
割りとはゲてる奴も多かったらしい。

俺は馬鹿だ。カッコばっか気にしてた。ハゲたって、みんな旧友、竹馬の友なのだ。恥ずかしがることなんてなかった。

「そう言えばタイムカプセル開けたぞ！」

「ああーたしか未来の自分に宛てた手紙だったな」

「そうそう、お前の手紙は俺が預かってるから今読んでやるよ」

「おおっ、読んでくれ。なんか恥ずかしいなあ、ははっ」

「よーし、読むぞ」

未来の僕へ。未来の僕はハゲているはずです。遺伝だからです。ハゲても気にしないで下さい。遺伝だから。でも、子供は作らないで下さい。遺伝で子供がハゲるからです。かわいそうです。

もし、子供が出来てしまったら教えてあげて下さい。君はハゲるよ  
遺伝だからね、と。

遺伝、遺伝、遺伝…

遺伝死ね！

【愛】 1（前書き）

出来損ない男の成長  
タク。

主人公『山本圭助』ニート。アイドルオ

## 【愛】 1

彼女は今週も相変わらず珍解答を連発。笑いも取りMCには散々いじられた。今回の放送も大活躍だ。最近は色々な番組に出演するようになったしドラマの話もあるようだ。これから、どんどん彼女は活躍の場を広げていくだろう。僕はそれが嬉しくて仕方ない。

僕がスザンナのことを知ったのは地元の地方番組のニュースだった。彼女はニュース内のグルメコーナーのキャスターだった。彼女のコーナー中のコメントは最悪だった。見ているこちらに何も伝わってこないし、的外れなコメントも多く見ているこっちがヒヤヒヤした。僕はそんな彼女を一目見た時からファンになった。理由は単純。顔が好みだからだ。

その後、彼女は地方を飛び出し、芸名を本名からスザンナに変えた。途中よく分からないオタクユニットに入ったりはしたが、今はゴールデンに出演、成功をおさめたわけだ。

僕は最近流行りのニートってやつだ。高校卒業後に就職した会社には半年も経たず辞めた。理由は単純、きついからだ。そんな僕の毎日、寝る・食事・風呂・スザンナ、この4項目のサイクルだ。親との会話はほぼなく食事以外は顔を合わせることはない。あちらも僕に干渉することはないので、この生活に不十分はなかった。

スザンナが出演した番組が終わると、早速パソコンを開く。某巨大掲示板のスザンナ板を見る為だ。僕のポリシーは見るだけであって書き込みはしない。僕にとってのスザンナ板のチェックは市場調査・情報収集なのだ。スザンナファン同士の馴れ合いには興味ない。

やはり有名になると注目も集まり数々の噂・裏話も出てくるものだ。

元ヤンだとか整形だとか馬鹿キャラは作っているだとか：挙げたばかりがない。でも僕はそんな事には全くもって興味ない。嘘だろうが本当だろうが関係ない。彼女が今まで歩んだ道はそりゃあ気になるし整形疑惑は多分真実なのだろう。しかし、あえて無視しておこう。なぜなら、今の彼女を陰ながら応援し見守ることが僕が今すべきことなのだ！と考えるからだ。

だが最近、僕のニート生活を危惧した父が口うるさくなってきた。僕はまだ若い、確かに時間は有限だが今はやりたいようにさせてほしい。一人旅もしたいし、一回は上京というものを味わいたい、あと「あいのり」にも参加したい。すべて味わい尽くすのに時間はまだまだ使う。まだ就職だなんて出来るはずがない。

そんな4サイクル生活が続いている中、大変なことが起こった。父が亡くなったのだ。早朝、母が父を起こしに行くと、すでに身体は冷たくなっていたという。心臓発作で突発的に亡くなったらしい。大黒柱を無くしたことで父の死の悲しみが癒える間もなく母が昼も夜も働くことになった。そんな時に僕はと言うと今まで通り就職もせずスザンナニートをしていた。あの頃の僕は自分以外に興味はなく、とことん自分に甘い男だった。

しかし女手一つで家庭を支えるのは、やはり無理だった。僕も働かざるをえない状態になった。流石の僕も就職する決意を固めた。僕が就職を決意するということは今までのスザンナ生活を捨てることでありスザンナとの決別を意味するものだった。僕は最後に思い切った作戦に出ることにした。やはり僕も男だ。一皮剥けば狼。もうファンが無理なら最後に告白して終わる！彼氏になってやる！僕はファンでおさまる気なんてさらさらないのさ。ファンからスザンナのたった一人の男になってやる。大体のアイドルファンは言うだろう「ファンだが恋愛感情はない」と。そんなもんは手に入らないと

思っているから言っただけだ。僕が先駆けになってやるさ。ファンの希望の星に！

つづく

【愛】 1（後書き）

実在の人物とは一切関係ありません。完全フィクション・妄想です。



## 【愛】 2

アイドルへの勇敢なる告白大作戦を決めた僕。作戦は以下の通りだ。彼女の母親が経営するスナックヘアブレッターを持つて行き母親をへて彼女にラブレッターを渡してもらう、以上だ。一見、穴だらけそうな作戦だが練りに練った作戦なのだ。彼女に直接会いに行くのは無理な話だ、ファンレターとして送ったとしたら他の数あるファンレターに埋もれ読まれることもないかもしれない。彼女に確実にアプローチする方法はこれしかないのだ。

僕は準備を整えると、スザンナママのスナックへ向かった。そのスナックは自宅から車で一時間の距離にあった。誰かが撮影した画像で見たことはあったが実際行くのは初めてだった。外見はどこにでもある田舎のスナックだ。「愛に来て」と言う名前らしい。スナックのネーミングセンスとして普通なのかよく分からない。僕はスナックに入るのは初めてで今から告白？をする緊張もあり、びびっていた。

勇気を振り絞りドアを開けた。カランカランと鈴が鳴った。煙草の香りと独特の中年層の香りがした。客は女性一人と男性二人の団体一組のみでカラオケを楽しんでいる。内装は多分スタンダードなスナックなのだと思う。

「いらつしやい」

煙草を吸うスザンナママだろうう人は無愛想な挨拶をした。綺麗かと言われたらまあ綺麗な人だった。まあスナックのママと言ったら皆こんな感じだろう。知らないけど、僕が少しきよどつて突っ立っているママが優しい声で言った。

「見ない顔だね。初めてなんでしょ？まあ座って」

僕はカウンターのママの正面の席に座った。ママは何も言わず水を

一杯出してくれた。僕はその水を一気に飲み干すと深呼吸をした。  
よし、言うぞ！

「あのー僕は客ではなくてですね。あのーなんというか」

ママは黙って聞いてくれていたので続けることにした。僕はカウンターにブランドショップの箱を置いた。中身はスザンナがブログで欲しがっていたブランドのバッグだ。30万もしたが何とかき集め購入した。その箱の上に白い封筒を乗せた。中身は僕が人生を賭けて紡ぎ出した輝かしい愛の言霊と電話番号。そして証明写真の機械で撮った顔写真。少しでもかつこよく見える様に白黒にしておいた、裏目にでたが。

「あのーこれをスザンナさんにお渡ししてもらえないでしょうか？いきなり変な事を言ってます。しかし僕は本気なんです。お願いします。」

僕は一息で全てを言い終えた。ふつと安堵の息を吐いた。

「貴方が入ってきた時から薄々分かってたわよ。よくあの娘のファンの方が来るからね」

だから何も言わずにいてくれたのか。

「この箱ってあの娘が欲しがってたブランド物でしょ？たぶん貴方の他にも、これ送ってくるファンはきつと要ると思うわよ。嫌なこ  
と言ってごめんね」

やらかした…そりゃあそうだ、僕と同じ様にバッグをプレゼントする奴が一人や二人居てるおかしくないぞ。

「ま、まあ…いいですよ。こんなん気持ちですから」

そう言っ僕は誰かとかぶっている可能性大のバッグの箱を軽くポンと叩いた。

「で、渡してもらえんでしょうか？」

そう、ここが大切な。かぶっていいようが何だろうが渡して貰えなければ意味がない。

「最近忙しいから、次いつ帰ってくるか分からないわよ。それでもいいなら渡しておくけど」

それは最初から了承済みだ。他の客は、こちらに興味を示すことなくカラオケに勤しんでいる。下手くそな歌だ。演歌ってこうゆうものか？まあいいや。

「ええそれで結構です。よろしく願います」

僕はそう言ってバッグと封筒を渡すと一礼して店を出た。

返事は二ヶ月先、半年先、いやそれ以上か。とにかく気長に待つしかない。僕の告白は終わった。ちなみに人生で初めての告白だった。翌日から僕は就職先を搜した。しかし、なかなか希望の会社に入れない。僕としては割りと名前が知られ楽で高給な企業がよかったのだが高卒の僕には到底無理だった。

僕は就職でウジウジやっていたある日、母の勤め先の介護施設から電話があった。母が倒れたのだ。母は毎日の仕事漬け、そして仕事の合間には家事と疲れ切っていた。母は過労で倒れたのだ。僕には母の苦勞が分かっていなかった、そばで母の頑張りを見ながら何とも思っていなかったのだ。

僕は母が運ばれた病院に走った。母はどんなに僕が我が儘を言おうが怒ることもなかった。僕がニートをしているのを心配しながら注意することは極力しないでくれた。僕はまだ養われる側の感覚だったのかもしれない。父が死んだ時に気付くべきだった、これからは僕が支え、孝行していかねばならないことを。

つづく

### 【愛】 3

僕は病院に着くと母がいる病室に向かった。母は点滴をされ穏やかな顔で眠っていた。久しぶりに母の顔をまじまじ見た気がする。僕の中で母の印象は小学生で止まっていたらしい。いつの間にか白髪が混じり、シワが増えたようだ。

「かあさん」

起こしたくはないが少しでも早く会話がしたかった。母はゆっくりと瞼を開けた。

「かあさん、大丈夫？」

「ごめんね、就職活動忙しいのに。大丈夫だから」

母の声はとてもか細く感じた。大丈夫な訳がない。母がこうなったのも俺が責任のようなものだ。

「こつちこそ、ごめん。迷惑かけてばっかで甘えるだけ甘えてガキみたいだよ」

僕は母の手を握った。女性らしくなくこつこつした、とても暖かい手だ。

「ガキだから心配なのよ。圭助は父さんとあまり仲良くなかったわね。でも父さんはとても圭助のこと心配してた。あの人は口ベタだから上手く伝えられなかったの。まあ親子なんてそんなものね」

今、考えれば大切な最愛の人を失った母の気持ちは相当だっただろう。でも僕には一切そんなそぶりも見せなかった。

「そうだったんだ。言ってくれば良かったのに…間違ってるって思ったら怒鳴って教えてくれれば良かったのに…」

「二人とも一人息子に甘いのかな。それに私は圭助が道を踏み外さない信じているし、やりたいことがあるなら後悔しないようにやってもらいたい」

「かあさん、もう僕は十分したいようにできたよ。優しい両親のおかげで。これからは少しずつ二人に返していくよ」

「返すって？」

「恩とか…愛だよ」

母の手を強く握った。僕の気持ちは上手く伝わっただろうか。口ベタな男の息子だから、言葉が足りてないだろう。でも母は口ベタな男の嫁、十分に伝わっているだろう。

それからすぐ簿記をかじっていた経験から町工場の経理の仕事が決まった。僕が給料を家庭にいれるようになり母の仕事量も減り、家事も分担することにした。

仕事も半年もすると楽になり、規律正しい生活が送れるようになった。僕が嫌っていた平凡で普遍的な生活に今は生き甲斐を感じていた。母もみるみる元気になり、コミュニケーションも増えた。馬鹿な話だが母は意外とよく笑う人だったと思い出した。こんなに家族の大切さを感じたのはいつ以来だろう。

仕事を初めて一年が過ぎたある日、今日もいつも通り出社していた工場長の奥さんと経理部のリーダーの初音さんに呼ばれ行くと、今日は早く帰っていい、お母さんの誕生日一緒に祝ってあげなさい、と言われた。有り難くお言葉に甘えることにした。余談だが初音さんの娘さんは「あいのり」のオーディションに参加したらしい。可愛いらしい人なのだが、見事落選した。顔も普通で特技もない僕はさらに無理だろうなあ…としみじみ思った。

母の誕生日を僕が祝うのは今までなかったことだ。誕生日さえ知らなかった。

昼に母と落ち合い、日本料理屋で食事し県内で有名な温泉に向かった。

途中わざと「愛に来て」の前を通った。ママが僕の買ったバッグと同じ物を腕に掛けてドアに鍵をかけていた。まあなんとなく知って

はいた。

彼女のブログに書いてあった。

「ママが新しいバッグ買ったらしいの！私とお揃い！！色まで一緒だって。ママはホントに私のこと大好きなんだよね！ママ元気かな？来週帰れそうだから楽しみ！」

これだけ書いてあればわかる。俺の買ったバッグはママへ、ラブレターは日の目も見ずごみ箱へ。まあ今更ながら、顔が好みだったただけで一時の僕の中での流行りみたいなものだ。ガキは夢を見たがるってものなのだ。

今の僕の流行りは初音さんと工場長の一人娘だ。今回は本気だし現実味があると思う。

母は温泉の帰りにこんなことを言った。

「圭助知らないかも知らないけど同級生なの。長谷部小夜ちゃんのお母さんと」

「長谷部小夜！」

「長谷部さんの娘にラブレター送ったらしいわねー」

ニヤニヤしながら母を僕を見ている。がぁーAV見つかるくらい恥ずかしい。

「一昨日、小夜ちゃん帰ってきたらしくラブレター読んだみたいよ。結果知りたい？」

「読んだの！？」

「いやいや今更かよ。一昨日、言ってくれよ、かあさん。」

「で、知りたいの？」「そりゃあ知りたいよ！」

もしOKなら…嬉しい！けど生活はどうなるんだ？僕が彼女の元へ、東京に行くことになるんだよね？

「やっぱり、いいや」

「どうして？」

「どっちにしたって僕は今の生活を崩せないと思うからね」

「うーん、なんだがよく分からないわよ」

「親なら理解してよ！」

僕は結局、結果は聞かった。

なぜならその翌週にテレビでスザンナが僕の話をしていたからだ。

「ときどき自宅にファンレター置いてく人いるんですけど、最近は顔写真付きでしたよ！しかも白黒！エノキみたいな可愛いらしい人でした。あははっ！」

終

## 【鬱】 1（前書き）

二人は結ばれるのか？話 主人公『レイ』フリーター。知能低。  
葛城』精神病患者。実家は名家。知能高。 ㊦



【鬱】 1

フリーターの朝は意外に早い。

今日は7時には起きていた。

昼飯をカップ麺で済まし家を出た。外は快晴だが、風が強く肌がヒリヒリする。自宅から徒歩20分の個人経営の喫茶店にアイツが待っている。向かい風のせいで集合時間に間に合いそうにない。

その喫茶店は俺が生まれる前からある。内装は何処にでもありそうでない、まあなんとというか時代遅れな感じだ。客席は少ないが満席になることはない。特徴といえば【喫茶ボサノバ】と言う名前とラブホテルのすぐ横と言うことぐらいだ。

俺は店内に入ると窓際の一番奥の席に居るアイツが手を振っていた。俺は小走りで席に向かった。

「ごめん、風が強くて」

「いいよいいよ、早く座って」

早く話がしたくて堪らないらしい。俺はココアを注文した。喫茶店のココアはホイップクリームがつくのが嬉しい。

「で、今日は何？」

「また話聞いてもらいたくて……」

必ず週に一回はコイツの話を聞く。何故か今週は珍しく2回目だ。

話とは、どうせ愚痴だろう。正直、話を聞くのは面倒臭い。だが断ることはできない。なぜなら彼女は精神病を患っているからだ。

断れば彼女が何をしだすか分からない。特に俺が原因で自殺なんかされたら堪らない。

「最近、睡眠薬が効かなくなってきたてね市販のなんかじゃ全く眠れないの」

うんうんと相槌を打って軽く流す。この話は前回聞いた。彼女は、

よく同じことを話す。

「でね、他の薬と合わせると毎晩7錠も飲まないといけないの」

彼女は面白い話をするかのような顔で話すが、全く聞きこたえがない。さっきの表情から一変、いきなり不幸を滲み出すような顔をして彼女は言った。

「私ね、最近寝る前に神様をお願いするの」

ココアを一口啜りながら聞いた。

「ふーん、何を？」

今までの傾向から言うと、天国へうんちゃらかんちゃら…とか、私のような人を救って…とかだろう。

「なんだとおもう？」

質問を質問で返すのは反則だろう。さあ分からないと答えると、少しは考えてよと膨れっ面をして、戻ってくるまでに考えてと言い残してトイレに行ってしまった。

彼女が抱える病はいくつかある。うつ病、自律神経失調症など、俺に覚えておく義務はないので後は知らない。彼女は悲劇のヒロインを気取っているのだ。他に自分の話を聞いてくれる人がいないから俺を相手にヒロインを演じる。

まあ彼女がそれで気が済むなら俺は我慢する。

彼女には大学受験の時に世話になった。高校三年の冬、俺は頭がい方ではなかったがキャンパスライフを懂れて大学進学を決めた。くだらない理由で決めた進学だから、あまり勉強はかどらなかった。そこで彼女が登場だ。彼女は秀才だった。志望は俺の大学の遙か上のランクの某有名私立大学。彼女は受験勉強の傍ら俺の教師役もしてくれた。そんなこんなで俺も彼女も志望校に合格した。

しかし、俺は勉強について行けず先月に大学を辞めた。彼女の方も病気の悪化で大学には行けていないらしい。彼女が発病した原因は家庭にあるらしいが大学でも何かあったと聞く。まあ他人の俺には

関係のない話だ。

彼女が戻って来た。何故かニコニコだ。

「どう考えた？」

全く考えてなかった、とは言えない。

「うーん、やっぱり思い付かないよ」

「ばか！じゃあ帰り際で教えてあげるよ、ねえねえ聞いて病院でね……」

別に知りたくねえけどね。彼女はとどまることなく俺に話し続ける。俺は適当に相槌。ああーココア冷たくなってるよ。あのラブホテルでかいなあ、この席からじゃ最上階までギリ見えないじゃん。てか何を血迷ったか最近、ヒョウ柄のパンツ買ったけど恥ずかしくて履けねえよなあ……なんて考えて彼女の話は右から左。途中に、なぜ私だけが……私の気持ちを分かる人はいない……とか言ってるのが聞こえた。

「帰ろうつか」

彼女は話を終えたらしい。

外は暗くなっていた。会計は俺が全て払った、ただのカッコつけだ。彼女は笑顔で、ありがとうと言った。彼女の笑顔だけなら俺の好みだ。

つづく

外に出ると一気に身体が冷えた。彼女は、寒い寒いと連呼している。そんなに寒いつて言われるともっと寒く感じるからやめるよな、と思う。喫茶ボサノバから彼女の自宅はとても近い。だからと言って彼女は薄着過ぎる。彼女に俺の上着をかけてあげた。

「ねえ、答え教えてあげようか？」

答え？ ああー自称悲しいお姫様の願い事ね。忘れてたよ。

「願い事だっけ？ なんなの？」

「あの時に戻してって願うの」

あの時？ なんか長い話になりそうだな。

「あの時っていつ？」

彼女はウキウキした声で言った。

「いつだと思う？」

早く話してくれよ。寒いし早く帰りたいんだよ。

「分かんない、教えてよ」

「いつも分かんないばっかだよ、本当に考えてるの？」

彼女の顔は暗くて分からないが眉毛をハの字に曲げているのだろう。どうせくだらない話なのに、勿体振って。聞く身にもなれよ。

「考えてるよ、いちいち突っ掛かるな面倒臭い、毎度同じ話聞く俺の身にもなれよ」

少し言い過ぎたか？ まあ彼女の為だ。このくらいいいだろう。

軽い沈黙の後、彼女から嗚咽がもれた。俺は泣かしてしまったらしい。少し反省。

「ごめんね、ごめんね…レイがなんでも私の話聞いてくれるのが嬉しくて、でもレイがそんな風に思ってるって知らなかった、ごめんね」

彼女はしゃがみ込み本格的に泣き出してしまった。俺はおどおどし

て、どうすればいいか分からなかった。彼女は病気とか関係なく繊細な女性なのだった。

「ごめん！言い過ぎた、一先ず立とう」

俺の声は彼女に届いてないようだ。ブツブツ何か言っている。レイに見捨てられたら私…とかなんとか。これはあかん、自殺フラグの気配が。

「よし、じゃあ俺ん家いこう！決定！」

俺は混乱していたのだろう。なぜか家に誘ってしまった。俺はアホか。だが言ったからにはしょうがない。彼女を立たせ手を引き俺の家に向かった。

家に着くまで無言だった。いつの間にか彼女は泣き止んでいた。家族にバレないように彼女を部屋に入れた。二人でベットに腰掛ける。と早速、俺はさっきの取り繕いをした。

「本心じゃないんだ、許してほしい」

彼女は下を向いたまま言った。

「私こそごめん、少ししつこかったよね」

俺はブンブン頭を振って否定を示した。彼女は続けた。

「なんかいきなり泣いちゃって恥ずかしい、でもそれだけ私にとってレイが大事ってことなんだよ」

「話し聞くだけの俺が？」

「そうなんだけど、そうゆうことじゃなくて…なんてゆうか」

彼女にとつての俺。考えたこともなかった。

「さっきの願い事の話なんだけど」

少しギクツと来て顔が引き攣ってしまった。

「ああー戻りたいって話ね」

「うん、レイもう一回チャンスあげるから考えてみてよ」今回は真剣に考えてみよう。

「レイと私の付き合いなんて短いでしょ？レイならわかるよ、私が一番幸せだった時だもん」

「そっか、たぶん分かったよ」

「じゃあ答え合わせね」

彼女が笑顔で言った。健康的な表情、みずみずしい唇、ピンクのほっぺ。あの頃の彼女の笑顔そのままだった。

翌日、彼女を家まで送っていくことになった。彼女の家までの道程は二人とも無言だった。あの彼女が何も話さないなんて珍しい。彼女の家が見えてきた。日本建築の立派な家だ。俺はなんだか寂しい気持ちになった。俺は彼女と繋いだ手を解いた。彼女がどうかしたのかと振り返った。

「あのさあ、これからは今まで以上に葛城さんの話聞きたいんだけど…ダメかな？」

「じゃあ一先ず、葛城さんはやめて名前で呼んでよね。あと、話聞くなら真剣に聞いてよね」

すべてお見通しだったようだ。でもさすがにラブホテルを見てたとは知らないだろう。

「真剣に聞くよ、てか毎回しっかり聞いているから！」

「ほんとに？まあいいや、じゃまた連絡するね」

「待ってる」

彼女はこちらを何度も振り返りながら手を振ってた。彼女が家に入るのを見送り俺は踵を返した。

今日は天気がいいし風もない。俺はゆっくり歩き出した。

「おい！！！」

振り返ると2階の窓から彼女が顔を出していた。

「レイ、あのヒョウ柄のパンツ！ないと思うよー！！」

声でけーよ馬鹿野郎。いつの間に見たんだよ、ホントに精神病かあ？俺の物差しじゃ計れん女だ。

のちに彼女とは頻繁に会うようになり一緒に暮らすことになった。  
いつの間にか彼女が精神病の薬を飲む姿は見なくなった。彼女は俺  
が王子様だと言った。毒にかかったお姫様を目覚めさせる王子だと。  
俺は彼女のシナリオに上手く乗せられたらしい。  
でも一生、俺は本物の王子にはなれないんだが。

終

## 【巻】 2（後書き）

実在のアニメとは一切関係ありません。



【幸】（前書き）

新興宗教の信者のオカンを救うため立ち上がる息子。主人公『神宮光太郎』計画性なし。単細胞。NSCに入りたい。

## 【幸】

「光太郎！時間！行くよー！」

朝の5時。辺りはまだ暗いというのにオカンは化粧をし服もよそ行きた。ああ今日だったか。週二回ある朝の集いだ。

一年ほど前からオカンが参加している新興宗教『幸福論』。あまり大きな団体でもない様だが活動は不明で怪し過ぎる。さすがにオカンをそのままにしておく訳にもいかず俺もオカンについて朝の集いに行き、実態を掴むこととなった。

朝の集いを終え8時頃に帰宅した。内容は瞑想、幸福体操、幹部方の徳高いお話、今日の格言、再度瞑想をして締めくくる。

団体の教祖は神明アラタと言う人物で、ある日突然に天啓を受けたという。ここでは神とは言わず聖司<sup>セイジ</sup>と言うらしい。ギャグみたいな話だ。

でだ、この新興宗教はやはり胡散臭いことをしていた。幹部が高額なお布施を強要するのだ。

「お金を縛られてはいけない。人間が作り出した汚い文化は捨てなさい」

即興で考えた文句だろう。オカンを助けるため俺は立ち上がった。これで二回目の朝の集い。

俺は考えた。常軌を逸したやり方には同じくらい、それ以上で対抗するしかない。というか、俺は少し楽しんでた。

小さな公民館を利用し始まる集い。狭い部屋に座布団が隙間なく並べられている。参加者は30代から40代の女性が主だ。瞑想が始まったら俺の作戦スタートだ。

幹部らしきオバハンが前に立った。ゆるーいオルゴールのBGMが流れる中、瞑想を始めて下さい。とオバハンが号令を出した。

皆、俯き目を閉じている。俺は少し時間を置き、いきなり体を前後

左右・縦横に激しく動かし始めた。

「ぐうああああーあああ」

出来る限りの低い声を出し目をひん剥いて体を横に倒した。異変に気付いた周りが騒がしくなり始める。隣のおばさんが大丈夫？と体を揺すつてくるが無視して奇声を発しのたうちまわる。

とうとう幹部のオバハンが近付いて来たのを確認し俺は跳び起きた。俺ができるもつとも穏やかで全てを悟った表情（例えるなら仏顔）をして直立不動。幹部のオバハンはびっくりし、ハッ！と小さく叫んだ。周りの人達はポカーンとしている。

俺はゆっくり口を開き、俺の出来る1番高い音域の声を出して言った、もちろん顔は仏。

「今、セージ様から天啓をうけました。私は全てを悟りました。私は今1番セージ様に近い存在なのです。今こそ、神明アラタ氏を離れ新しい道を人々に示します。私を産んだ偉大なる母にしてジャパマリアと共に――――」

オバハンは状況をのみ込めていない様子だ。幹部ババアをじっと見つめ、念を押した。

「よろしいでしょーか？」

「はっ、はあ」

幹部ババアが腑抜けた声を出した。まあ普通そうなるだろう。

「それでは失礼しますよ」

といいオカンの手を取り神様のイメージでフワフワ浮かんでいるような歩き方をして公民館をでた。後に『幸福論』からは頻繁に連絡が来るようになってしまった。

「どこに行けば光太郎氏の講話が聞けるのでしょうか？」

とか、極めつけは…

「明神アラタ氏が光太郎氏を次期幸福論代表にと申し出ております」

数年後、幸福論信者の全家庭には明神アラタと俺とオカンの写真が

飾られることとなった。

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6044d/>

---

足りない人達の話

2010年12月30日18時21分発行